令和４年11月25日　　第577号

情　報

更生の花は
慈愛の土に咲き

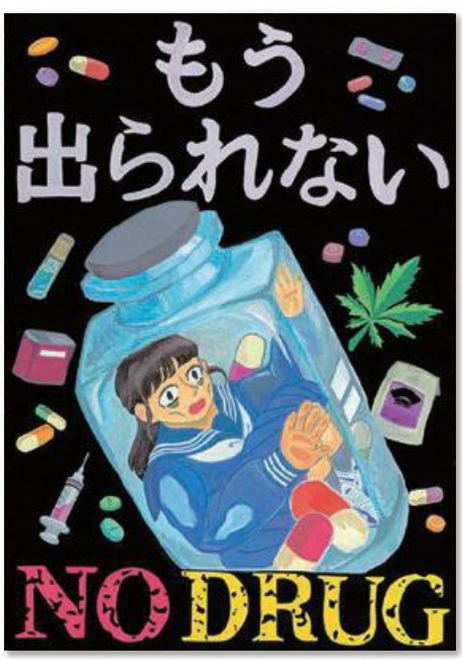
文京区保護司会

令和4年度　文京区内の中学校生徒による

薬物乱用防止ポスター・標語

文京区地区協議会　地区会長賞

ポスターの部



区立第九中学校３年　山田　瑞穂さん

区立音羽中学校２年　岡本　宜也さん

標語の部

薬物の　さそいを断る　その勇気

区立第一中学校１年　山中　舷さん

INDEX

仲間がいるから、依存から回復できる。「ジャパンマック」…… 2
地域活動紹介「千石ブックメルカード」…… 4
令和４年度ブロック別保護司組織運営連絡協議会…… 6
令和４年度第Ⅱ期定例研修 …… 8
新任保護司紹介…… 9
文京区保護司会70周年のお知らせ …… 9
会務報告 …… 10
更女だより …… 11
ホッと一息　あとがき …… 12

仲間がいるから、依存から回復できる。

特定非営利活動法人 ジャパンマック

ジャパンマックは、アルコール・薬物依存症者等に身体的・精神的・社会的な支援サービスを提供することによって依存症からの回復と自立を支援している団体です。依存症と向き合って40数年の実績を誇り、東京では、男性の依存者のための「みのわマック」や女性のための「サポートセンター オ'ハナ」、他にも「RDデイケアセンター」があり、「ナイトケア」の宿泊入所施設を備えています。今回、北区にあるみのわマックを訪問し、成宮康彦事務局長と森啓介施設長に、依存症からの回復プログラムやその理念などをお聞きしました。 （文：広報部 塩川浩司）

近年、東京のジャパンマックでは、元東京保護観察所長の荒木龍彦氏が理事に就任されていることもあり、犯罪をした依存症の方の受け入れにも力を入れているそうだ。

「つい一昨日にも保護観察所から、更生保護施設内で再飲酒してしまっている対象者を受け入れて欲しいという急な打診があって、バタバタと手配して、昨日にはナイトケアに入寮してもらいました。というのは、本人が決心したら揺るがないうちに来てもらうのが重要で、一人で考えてしまう時間が一番危険なのです。だから、絶対に一人にはさせない。居場所と話せる相手が必要なのです」と事務局長の成宮さん。

ジャパンマック事務局長の成宮康彦さん（左）と、みのわマック施設長の森啓介さん（右）。

「一番不安なのが本人で、その不安ほど再飲酒につながる要因はありませんから、ここは居てもいい場所なんだという安心感に変えてあげる。そのための努力は惜しみません」と、施設長の森さんも口を揃える。

依存症の回復プログラム

そもそも依存症者にとって、日常のイライラをすべて丸く帳尻をあわせてくれるのが例えばお酒という存在。本人も頭ではわかっているけど、「一杯だけ飲んじゃえ」というスイッチが入ってしまうと、自分ではコントロールができなくなるのが依存症という病気だ。だから、まずは病気の治療が先決で、その結果として最終的に就労自立にたどり着けるというのがマックの考え方だという。

「お酒や薬物等で、生活のリズムが崩れているので、まずは生活を整えるのが必要です。そのためには、今までの考え方や価値観を変えないといけないのですが、それが何で必要なのかすらもピンとこない人が多い。ここは、そこから見直していく訓練の場なのです」（成宮さん）。

そのマックのプログラムの根っこになっているものは、AAというアルコールの自助グループだという。1930年代にアメリカで始まったというAAでの当事者ミーティングは、依存症者同士で体験を語り合うグループセラピーとなっている。

みのわマック。男性の依存症者のための生活訓練事業所。1978年に設立者ミニー神父が荒川区で開設した三ノ輪マックが、1993年に北区滝野川に移転してみのわマックになった。

「自分が過去どうであったか、その過去のせいで今どうなってしまっているのか、これから先はどうしていきたいのか、という自分自身の話をみんなで順番にします。聞く側は黙って話を聞いて、意見をしたりはしません」と森さん。

百聞は一見にしかずと、実際この日行われていた、ミーティングに参加させていただいた。20数人の参加者が輪になって座り、アルコール依存だという司会担当の職員の体験談から始まって、パチンコによるギャンブル依存の話、飲酒を踏みとどまっているという人の話と続き、誰もがじっと耳を傾けている。

「なんだか自分も自分の話をした

くなりました」と、参加後の感想を成宮さんに伝えると、「みなさん、そう言われる方が多いんですよ（笑）」とのこと。「なかなか本音で話せる機会ってないですよね。他の人の語りが呼び水になって、自分自身の心の底からの声が、だーっと泉のようになって出てくるのです」と。

自分一人で闘っている人が多いので、「もう闘わなくていいし、その責任を自分だけで負おうとしなくていいんだよ」と言ってあげられるのがなにより。まずは、自分が依存症であるという自覚を深める。その上で、他の仲間が「依存症であるあなたを、ここにいる私たち全員受け入れましたよ」という共感による安心感を、理屈抜きに深めていくという。

このように、仲間同士の語り合いでこそ、今まで気がつけなかったことに気がつけたり、あいつもやっているから俺もやろうと、職員以上に同じ目線の仲間同士の関わり合いの環境でこそ育っていくのが、プログラムの本質であるという。

依存症者の依存症者による支援

成宮さんや森さんは自己紹介をする時に、自分のことを「アルコール依存の○○です」と言う。実は、マックで働く職員は、ほぼ全員が利用者のOBなのだそうだ。

「私たち依存者は、他人から『あなたのこと、わかりますよ』なんて言われても、『お前に俺の何がわかるんだ』と反発しか出ないのです。精神科のお医者さんに対してもそう。でも依存症者同士だったらわかり合えるのです」（成宮さん）。

例えば、今日マックに来たばかりの人がいるとすると、2年後、3年後、そしてOBの人までここにはいるので、そういう実際の姿を目で見て、自分の具体的な目標ができる。そうして依存しているものを止め続けていって、まずは、アルバイトから仕事を始めてみる。次にアパートを借りて一人暮らしの練習をしてみる。そのように段階を上っていって、マックも終了という頃には、生活も落ち着いてくる。

「それ以降はOBとして、『あなたがしてもらったことを、今度は、今困っている人にしてあげよう』ということになります。自分がどういうことをしてもらってきたのか。どういうものを取り入れて、またどういうものを排除して、今自分がいるのか。ということを、次の人に『のべつたえ』していく取り組みに力を入れています」（成宮さん）。

依存症は回復する病気です

マックでのプログラムは、通常、日中に2回、そしてナイトケアで1回の3ミーティングを毎日休み無く、成宮さん曰く「へたなサラリーマンより忙しい（笑）」という生活を続けていって、個人差はあるが、回復までに2～3年はかかるという。途中で挫折する人もいるし、また何年かして戻ってきて再チャレンジする人もいる。

「単純にお酒とか、薬物を抜くだけってできないんです。その人の生き方、考え方、気持ちの処理の仕方に、お酒や薬物、ギャンブル等がすり込まれてしまっているので。もう必要ないと、理屈抜きで思えるまで、その人の生き方そのものを総入れ替えする訓練ですから、2年とか3年でもまだまだ足りないくらいです」と、成宮さん。

「マックでは、依存症に特化した支援をしています。保護司さんはいろんなケースにおいての対象者さんを見られていますので、お互いの得意分野でうまく連携を取りながら、更生の支援をしていけたらいいと思います」と語っていただいた、ジャパンマックの訪問でした。

3階のミーティングスペース。

ミーティングに参加して
（広報部　西川）

「アメリカのプログラムが元なので“神”が出てきますが、自分なりに置き換えていただければ。日本でしたら“お天道さん”とか」とスタッフの方に伺っていたので、参加者が読み上げるハンドブックの一文が、すとんと胸の奥に入ってきました。同じ病と向き合う仲間の前で過去を語ることにより自分自身を確認していく。「今日は大丈夫。きっと明日も」そう思わせてくれる居場所がそこにはありました。

2階のリビングスペース。自分たちの食事作りも重要な回復プログラムのひとつ。

～文の京の北のまち、千石が「本と絵本のまち」になることを願って～

千石ブックメルカード　松本貴子

「あら、この絵本あなたが小さな頃、よく読んだのよ」「え～、そうなの？　あ、この絵なら覚えてる」

これは、会場に来てくださったある親子の会話です。

去る一〇月九日(日)、私が住むまち千石で、「千石ブックメルカード」という本のイベントを開催しました。

初開催は二〇一九年でしたが、その後コロナ禍に突入し、しばらく休止していました。三年ぶりとなる今年、開催すべきかをギリギリまで随分悩んだり迷ったりしましたが、全てが終わった今は、「思い切って再開してよかった！」という思いが残っています。（もちろん反省点も山ほどありますが……）

イベント名の「ブック」は本を、「メルカード」はスペイン語で市場を意味します。本のフリーマーケットを介して人と人とが繋がりますように、との思いを込めて名付けました。

この、本のフリーマーケット形式のイベントは「一箱古本市」と呼ばれ、やねせん（谷中・根津・千駄木）エリアが発祥の地。二〇〇五年に初開催され、段ボール一箱分の本屋さん巡りを楽しむイベントとして、その後全国に広がっていきました。（お手本にしている本家「不忍ブックストリート」の公式サイトはこちら　http：//sbs.yanesen.org/）

このイベントをすることになったきっかけを辿ると、母という源泉にたどり着きます。

母は私が小さい頃、自宅の玄関先に本棚を置いて、近所の子どもたちが自由に本を読めるようにしていました。その時は知らなかったのですが、この活動は「家庭文庫」と呼ばれ、その頃全国各地で盛り上がりを見せていた市民活動の一つだったそうです。

家にたくさん本があったことから私自身も本が好きになり、いつか家庭を持ったら母がやっていたような文庫活動がしたいと思うようになりました。

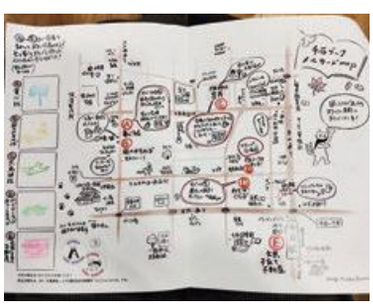
ところが現実はそう簡単にはいきません。結婚を機に上京すると東京の地場産業の一つが出版、印刷、製本業だと気づいた私は、右も左もわからないままに本作りの世界に飛び込みました。そうなると日中は家にいないのでお昼に玄関を開け放つことが叶いません。そのうち子どもが産まれ、あれよあれよという間に月日は流れていきました。

そんな中出会ったのが、谷根千エリアで定期的に開催されていた一箱古本市。時にボラ

ンティアスタッフとして、時に一箱店主として関わっているうちに、すっかりその魅力にハマってしまった私は、子どもたちと色々なまちの一箱古本市に出かけていき、自分たちで屋号を決める嬉しさ、自分たちで箱の飾り付けをする楽しさを味わいました。それからさらに月日が流れ、子どもたちが高校生になった頃、ふと「住んでいる地域で一箱古本市を開くことができたら」と思い立ちました。千石でするからには千石らしく。そうだ、この町には絵本や児童書の出版社が多いから「本と絵本のまち・千石で、ヒトハコ本屋さんをめぐる小さな旅、しませんか？」というキャッチフレーズはどうだろう？　そんなことを思いついてからは、少しずつですが具体的に前に進んでいくことができました。

ご近所さんに相談をしたところ、有難いことに、みなさん快くお知恵を貸してくださいました。

初回時に、私がバタバタ走っているのを見かねてお声がけくださったのは、社会福祉協議会、フミコムさん。その後「Bチャレ」という制度に申請、今回はその助成を受けながら準備を進めることができました。おかげで前回はコピー用紙だった配布物「千石お散歩ｍａｐ」はきちんとした印刷物に。前よりも多いスタンプラリーの景品を作ることができたのも「Bチャレ」あってのことです。



当日同時開催の、児童書の出版社・童心社さんでの「絵本の読み語り」「オリジナル絵本づくり」と、理系の出版社・仮説社さんによる「煮干しの解剖実験」は、初回と同様に。そして、年に一度だけのイベント（点）とプレイベント（点）を線で繋ぐことができたらという思いから、6、7、8月にＺＩＮＥ（冊子）作りの講座を新設しました。

それぞれの会場に分散していた店主さんが最後に一堂に会する場として「閉会式&表彰式」を行なったのも新たな試みでした。個性豊かな箱作りをした店主さんに贈られる「千石賞」を受賞した方の「実家のある千石に久しぶりに帰り、本のイベントに参加できて嬉しかったです。今は区外に住んでいますが、いつか千石に戻り絵本屋さんが開けたらと思っています」という言葉には意表をつかれましたが、同時に大いに励まされました。

最初は個人的な思いからスタートしたこのイベントですが、本を媒介にして人と人が繋がり、点と点が結びつき、いつしか面になっていく……そんな景色を見ることができたなら、そのお手伝いをすることができたなら、これに勝る喜びはありません。

仕事と育児の両立が難しくなり、職場がある文京区に引っ越しを決めた時、三重に住む母はこう言いました。「漱石の小説に出てきたあの町に、まさかあなたが住むなんて……」かつての（自称）文学少女らしい一言です。もしも今母が生きていて、そんな町で娘が本のイベントを始めたと知ったら、目を丸くして驚くに違いありません。

そんな母の驚いた顔、まちの人の笑顔が見たいから、これからも一緒に喜びを分かち合える仲間と一緒に、細く長く、続けていけたらと思っています。

応援をしていただけたら嬉しいです。

■千石ブックメルカードの公式ホームページ➡
https：//sengokubookmercado.hp.peraichi.com/2022

■千石ブックメルカードの公式 Twitter ➡

令和４年度

ブロック別保護司組織運営連絡協議会

日時　令和４年10月26日（水）午後２時開会
会場　北とぴあ　飛鳥ホール（北区）

協議題　「保護司適任者の確保」
「更生保護サポートセンターの現状と課題」
「保護司の考えるデジタル化・省力化」
の全部または一部

鈴木健北区保護司会会長の挨拶

花川與惣太北区長

生駒貴弘東京保護観察所長

趣旨

令和３年度の東京都対策本部における保護司の適任者確保のための取組方針においては、①全ての関係者が、保護司の適任者確保の必要性・緊急性についての意識を共有すること。②保護司活動の現状と課題を把握・分析し、具体的な対応策を検討すること。③保護司の負担軽減策を推進すること。④適任者確保のために有効な社会資源を最大限に活用し、積極的な働き掛けを継続すること。などが定められ、その具体的取組として、①各地区保護司会においては、保護司一人一人が適任者確保の必要性についての意識を高め、具体的に適任者確保に向けた取組を進めていけるよう、対策チームの設置を検討する。②保護司の自宅以外の対象者との面接場所の確保状況について各地区保護司会での実態調査を行い、保護司のニーズを把握した上で、保護観察所と各地区保護司会が共に対応策を検討する。③サポートセンターの運用状況・課題について各地区保護司会での実態調査を行い、保護司のニーズを把握した上で、保護観察所と各地区保護司会が共に一層効果的な運用について検討する。④東京保護司会連合会において、各地区保護司会から選定されたＩＣＴ化推進担当保護司による協議を重ね、各地区保護司会への技術サポートや保護司専用ホームページのモデル地区での試行について支援を行うなどし、東京保護司会連合会及び各地区保護司会におけるデジタル機器の環境整備やＩＣＴ活用技術の向上を図り、ＩＣＴ化を一層促進する。などが掲げられている。

保護司の適任者確保に向けては、引き続き、保護司活動の現状と課題の把握・分析や、負担軽減策の推進が重要な課題であるため、令和４年度においては、標記協議題について協議を行うこととする。
（令和４年度ブロック別保護司組織運営連絡協議会　第２ブロック資料より）

文京区意見発表者　西川 素子

文京区からは優先協議題となっている「更生保護サポートセンターの現状と課題」「保護司の考えるデジタル化・省力化」について発表いたしますが、「保護司適任者の確保」について少し触れますと、定員82名に対し現在64名。会員個人の紹介に頼っているのが現状ですが、結果、地域団体で活動を共にしている方の入会が増えており、既に関係ができているので保護司会内での活動もしやすくなっていると感じます。ただ、入会にあたって通信手段や研修・会議の時間帯等で負担を感じないよう、活動のデジタル化・省力化を他の地域団体と同程度ま

で進めることが必要と考えます。

1 更生保護サポートセンターの現状と課題

（1）サポートセンターの概要

開設年月：2018（H30）年12月
開所日時：月・水・金　10時～16時
場　　所：文京区本郷4－15－14
　　文京区民センター1階
面　　積：9・55㎡（3坪弱）
設　　備：電話・FAX、ノートPC、
　　プリンター、Wi－Fiほか
担当者：企画調整保護司が午前と午後各2名の交代制。ベテランと経験の浅い保護司、地区や担当部署が異なる保護司等を組み合わせている。

（2）サポートセンターの現状

【保護司会活動の拠点として】

① 当番保護司間での処遇・会務についての相談や、保護司OBとのコミュニケーションの場として役立っている。
② 保護司や各部署間の連絡調整、郵便物受け渡し場所として使用。
③ オンライン講習などで利用。
④ 対象者との面接場所としての使用は2回／月 程度。

【地域住民に対しての活動】

① 「更生保護サポートセンター相談室」の看板を出しているが相談はほとんどない。

（3）サポートセンターの課題と対応策

【保護司会活動の拠点として】

① 鍵は区が保管しており、開所日時に制限あり（火・木は民生委員使用日）。3年経ち会長も鍵を1本保管、必要時は開所日以外にも利用できるようになったが、都度会長と鍵の受け渡しが必要。
② 開所日の制限、郵便ポストが設置されていない等、事務局としての機能が十分果たせない。
③ 狭いため、班や部の会議使用はできない。
▼①から③については実績を上げ、行政へ働きかける。
④ 対象者との面接利用時は、当番保護司は別の場所で待機。
▼各地域活動センターも無料利用できることを会員に周知。
⑤ 企画調整保護司は増えているが、サポートセンターへの関わりは十分ではない。
▼保護司会内で周知し、理解を求めていく。

【地域住民に対しての活動】

① サポートセンターの区民の認知度が低い。
▼サポートセンターの連絡先や相談の具体例等を広報誌『情報』で周知する。また警察少年係との連携や、学校への周知を図る。
② 部屋の中が見えないので入りづらい。
▼月・水・金はポスターを掲示するなど、工夫が必要。

2 保護司の考えるデジタル化・省力化

対象者への処遇活動については、「H@」の活用がデジタル化・省力化に直接つながると考える。保護司会活動については、通信手段をデジタル化することで、印刷・配布の手間や保管スペースが削減され、結果、業務の省力化・効率化につながると考える。

（1）デジタル化・省力化の現状

【対象者への処遇活動】

① 「H@」の利用は「お知らせ」「研さん資料」の閲覧程度。
② 主任官、複数担当の保護司間の連絡は主に電話。

【保護司会活動】

① ICT化検討会で会員のデジタル環境を調査した結果、ほとんどの会員がメールでのやりとりが可能だが、習熟度に差がある。
② 周知や出欠にメールを使用する部が増え、FAXの使用が減ってはいるが、FAXを希望する会員も一定数あり。
③ 広報誌『情報』は冊子配布と、区のホームページ、文京区社会福祉協議会が運営するサイト「どっとフミコム」への掲載を併用。
④ 「活動結果報告」にFAXを使用、会計伝票は紙保存。

（2）デジタル化・省力化の課題と対応策

【対象者への処遇活動】

① 主任官、複数担当の保護司間の連絡に「H@」のメッセージボード機能が活用できていない。
▼バックアップの必要がないのはメリット。登録者を増やし積極的に利用する。

【保護司会活動】

① スマートフォンやタブレット、パソコンの習熟度に差がある。
▼サポートセンターで練習機会を設ける。
② チャット形式のツールでは過去の内容を探しにくい。Eメールは適切なタイトルをつけないと、見失う。
▼ツールは協議人数・内容により選択。Eメールはタイトルと内容の一致に留意。
③ PCの故障等に備えたデータ保存が必要。
▼外付けHDD、USB、クラウドストレージ等、複数の方法でバックアップを作成する。
④ スマートフォンではZoomや「H@」の操作性が良いとは言えない。希望者へのタブレット支給が望まれる。
⑤ 「活動結果報告」・会計伝票のデジタル化が望まれる。

令和４年度　第Ⅱ期定例研修

日　時　令和４年10月13日（木）午後２時半～
場　所　文京区民センター2A
講　師　嶋田華乃 保護観察官

嶋田華乃氏

テーマ「性犯罪再犯防止プログラムを活用した処遇について」

研修部　浅川 昇

平成16年に奈良県で起きた女児誘拐殺人事件を受けて、性犯罪者処遇プログラムが平成18年に導入され、その後の効果検証もなされ一定の効果が認められた。そして、令和４年度から新たな「性犯罪再犯防止プログラム」が実施されることになった。新旧プログラムの変更点は、シート形式からワークブックの導入へ、また、セルフチェックシートを活用したメンテナンスプログラムを導入（導入プログラム、コアプログラム、メンテナンスプログラム、家族プログラムから構成）し、特別遵守事項として受講を義務付ける者を18歳以上に拡大したことである。

性犯罪再犯防止プログラムにおける導入プログラムでは、実施対象者にプログラムの目的を理解させるとともに、5課程からなるコアプログラムの趣旨、認知行動療法の内容及び全体像について説明する。各課程は、おおむね２週間おきに実施され、その日程は保護観察開始時に対象者にあらかじめ指示され、遅刻・欠席は認められない。東京保護観察所では、コアプログラムは、Aセッションを除き、原則、特別処遇実施班による集団実施となっており、集団処遇では各対象者はニックネームを使用する。Aセッションは「性加害のプロセス」で「事件を起こしたとき」と「起こさずに対処できたとき」に注目し、事件の仕組みをサイクル図を用いて理解していく。Bセッションは「性加害につながる認知（考え方）」という概念を理解し、「認知のくせ」を特定する。Cセッションは「コーピング」で、事件のサイクルから抜け出し、サイクルを進めないようにするための具体的な方法（コーピング）を検討し、実際にできそうなものを選び、実行できるように具体化する。Dセッションは「被害者の実情を理解する」ことで、被害者が受けた影響を正しく理解し、事件につながる「認知のクセ」を改めて考え、再犯・再非行防止に向けた動機付けを高める。Eセッションは「二度と性加害をしないために」これまでの各セッションの内容を振り返り、性加害を起こさない方法を具体的な行動計画としてまとめ、意識を強化する。また、再発防止に向けた取組を支える「社会サポート」の存在に気付かせ、うまく活用できるよう対象者と一緒に整理する。そして、「なりたい自分」を想像し、近づくため方法を考えて「再発防止計画」を完成させる。

次に、メンテナンスプログラムの目的は、再発防止計画を定期的に見直し、「なりたい自分」に近づき、二度と性加害をしないことにある。また、コアプログラムは実施対象者との定期的な面接の中で実施するが、当分の間、性非行対象者には実施しないことになっている。なお、セルフチェックシートを活用した指導については、処遇区分がS、AA，Aの対象者のみで、B区分になるまで毎月、原則担当保護司が実施することになる。

アセスメントについては、過去の犯罪歴や年齢などの処遇によって変化しない要因の静的リスク評定と、変化させることはできるが介入がなければ比較的変わらない要因の動的リスク評定、そして、再犯する直前に現れる兆候など短期間で変容する要因の急性リスクチェックがある。急性リスクとは再犯の兆候であり、その内容が見られた場合は、保護観察経過報告書に記載するなどして、至急主任官に連絡をする。性犯罪再犯防止プログラムのメンテナンスプログラムでは、保護観察中を通して性犯罪に至るプロセスを再確認し、再犯の兆候がないか確認していくことが重要である。

富坂班　岩本（いわもと）　祐輔（ゆうすけ）

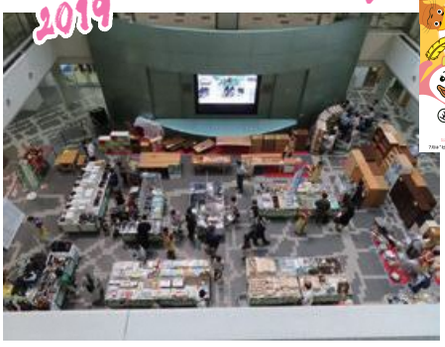
江戸っ子でもないのにセッカチで、息子たち（16歳&12歳）が脱ぎ捨てた靴下がリビングに転がっていると、いますぐ片付けてほしいタイプの岩本です。一方の息子たちは「はーい」と返事はいいものの、「ま、後でいいや」というノンビリ屋。こうなると短気な私は「早く！」と声を荒げ、彼らはシブシブ従うわけですが、どうも後味が悪くなります。

そして本稿を執筆している本日、リビングには相変わらず丸まった靴下が、どんなに厳しく彼らに接しても行動の改善につながらないことを哀れな私に思い知らせるかのように転がっています。

つい先日、保護司の使命は「犯罪をした者及び非行のある少年の改善更生を【助ける】」（保護司法第一条）ことであり、決して「改善更生【させる】」ことではないと学びました。私もただの口うるさい親父になるのではなく、息子たちが自ら靴下を片付けられるよう「助ける」には、どうしたらよいかを考え、実践することで、保護司活動に何かを還元していけるかも・・・そんなことを思う今日この頃です。

文京区保護司会は来年70周年を迎えます

70th anniversary



会務報告

■正副会長会議

令和4年9月1日（木）18：30～19：40
於：文京区民センター4A
出席者：6名
第二ブロック保護司組織運営連絡協議会
10月26日当区の出席者を検討、各人に依頼
理事会日時検討　（伊藤 記）

■正副会長部長会議

令和4年10月1日（土）18：30～19：30
於：文京区民センター4B
出席者：11名
10月20日の理事役員会について
第二ブロック保護司組織運営連絡協議会の準備について
70周年行事に向けて検討　（伊藤 記）

■理事役員会議

令和4年10月20日（木）18：30～19：30
於：礫川地域活動センター2F多目的室
出席者：20名
上半期各部各班の活動報告、会計報告
下半期各部各班の活動予定発表
70周年行事について
11月9日の社明運動について　（伊藤 記）

■薬物乱用防止キャンペーン標語ポスター選定会議

令和4年9月8日（木）10：00～11：30
於：文京区民センター2A
出席者：3名　他17名
文京区立中学校から応募作品の標語、ポスターの優秀作品を選定　（伊藤 記）

■令和4年度第Ⅱ期定例研修

令和4年10月13日（木）14：00～16：30
於：文京区民センター2A
出席者：32名　他1名
テーマ「性犯罪再犯防止プログラムを活用した処遇について」
嶋田主任官による研修　（市川 記）

■令和4年度第2回自主研修

令和4年9月22日（木）18：00～20：00
於：文京シビックセンターシルバーホール
参加者：31名　他1名
講師　文京区教育センター児童発達支援係長　西森紀江氏
発達障害者への接触にあたり「運動と感覚」「職員との関わり」「生活支援」を大切にしている。　（市川 記）

■広報部会議

令和4年9月2日（金）14：30～15：30
於：区民センター2B
出席者：5名
情報576号校正作業及び会議
情報577号編集作業及び会議　（山田 記）

令和4年9月22日（木）13：00～14：50
於：シビックセンター4F会議室A
出席者：10名　更女5名
情報576号発送作業及び会議　（山田 記）

70周年記念誌第2回会議

令和4年8月31日（水）18：30～20：10
於：シビックセンター区民会議室4A
出席者：10名
ページ数、発行部数、文字フォント、保護司全員が寄稿するかを検討
品川区、荒川区、墨田区の周年誌を参考に様々な意見がでた　（山田 記）

70周年記念誌第3回会議

令和4年9月27日（火）18：00～19：30
於：区民センター2D
出席者：11名
企画内容検討、令和5年12月発行に向け
令和5年5月に原稿依頼。6月末原稿締切、7月末入稿と決める。予算100万円以内に収まると確認　（山田 記）

■第2回ネットワーク部会議

令和4年10月13日（木）17：30～18：20
於：区民センター2B
出席者：11名
関連団体交流会について　（今井 記）

■保護司が参加した行事

駒本小学校運営連絡協議会

令和4年8月29日（月）16：00～17：30
於：駒本小学校多目的室
出席者：4名　他10名
学校運営に関する報告と児童の学校や家庭での様子
地域活動に関する情報交換をした　（武智 記）

関東地方保護司代表者協議会

令和4年10月6日（木）13：00～17：15
於：さいたま市ホテルブリランテ武蔵野
出席者：1名
講演「コロナ禍におけるギャンブル依存症問題」
講師　田中紀子氏
コロナ禍における保護観察及び保護司活動において保護司に求められる役割についてグループ協議　（亀田 記）

■哀悼

桐友会　森川成様　令和3年7月ご逝去
桐友会　山本雅子様　令和4年2月ご逝去
桐友会　宮崎文雄様　令和4年9月ご逝去
コロナ禍のため掲載が遅くなりました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます

薬物乱用防止ポスター・標語展

富坂地区　大橋 喜子

九月二十六、二十七日に三年ぶりの薬物乱用防止ポスター・標語展が、シビックセンターのアートサロンで開かれました。コロナ対策として入り口で入場者の方に、お名前と連絡先のご記入をお願いしました。

今年も多くの作品の応募があり、地区会長賞・佳作そのほか入選作品が選考されました。会場には実物の薬物の展示やビデオの上映もあり、理解を深めることができる内容になっていました。来場者はじっくりと時間をかけて鑑賞されていて、「すべて中学生が描いたのですか?どれもすごい作品ばかりですね」と、声をかけてくださる方もいらっしゃいました。

ポスター・標語はどれも力強く防止を呼びかけていて、デッサン力は毎年向上しているように感じ、どれもが目を引く作品であり、標語はわかりやすい言葉で訴えていました。

中学生に薬物乱用防止の教えはまだ早いかと思っていましたが、薬物乱用の低年齢化が進み友達関係を大事にする年代でもあるので、早い時期に指導を受けていく必要があると、ビデオを見て改めて感じました。なかなか親子で話し合う話題ではないかと思いますが、一緒に見に来ていただき持ち帰っていただいたリーフレットを参考にして、親子ともども薬物乱用による心身ともに与える影響の怖さや防止の大切さを知ってもらう良い機会になってくれることを望みます。

啓発広報活動パネル展示

文京区男女平等センターまつり
令和４年10月22日(土)・23日(日)
文京総合福祉センター祭り「アートギャラリー」
令和４年11月５日(土)・６日(日)

文京区更生保護女性会会長　時田 千里

文京区男女平等センターまつりにパネル展示の参加は昭和61年より開始しております。２枚の模造紙に当会の概要や活動紹介を見やすく分かりやすく工夫をして制作します。毎年、違うデザインやレイアウトを考え更女活動の主旨も含めアピール部分も強調しつつ更女広報部中心で作成してきました。ここ数年はコロナ禍のため集合して新しい作品を作成することができませんが、それまでのポスターの中から選んだ作品を展示し、他に毎年編集発行している機関紙『文京更女』や手作りの「花せっけん」、更生保護のチラシ、入会申込書等を設置し来場の方々の目にとどめていただいております。

文京福祉センター江戸川橋で開催される文京総合福祉センター祭り「アートギャラリー」は大塚地区の更女が担当し、開催中は他のグループの皆さんと地域の情報交換など交流を深めることができるようになりました。

ほかには、文京ボランティア・市民活動まつり、文京区青少年健全育成会湯島地区「地域こどもプラザ」等に随時、参加しております。

これからもより多くの方々に更生保護女性会の活動を広く知っていただくように努力して参りたいと思います。

ホッと一息

Break Time

駒込班　宮田 知江

平成17年1月、東京保護観察所の任命式に伺った時の保護観察所長さんは、大学の法学部の同級生でした川本氏が就任をされていてびっくり。式と講習が終了すると、声を掛けてくださって、お話をさせていただきました。あれから18年、諸先輩に色々とご教示をいただきつつ今日迄過ごすことができまして、深く感謝を申し上げます。

しかし3年前の8月末に私は左足の外反母趾の手術の為、大学病院に10日間入院。その日の午後から諸検査を受け、肺活量の測定で終了。検査室からカルテを受け取った付き添いの三女がそのカルテを見て「肺年齢90歳と書いてある。もう死んでいるね」と言われ私は思わず笑い出してしまいました。それから退院後の外出時には三女が必ず車で送ってくれるようになり、家族に負担をかけていると感じてしまいました。

そして今年77歳になり12月に任期満了による退任。私にとっては、おおきなホッと一息です。

●●●

本富士班　森山 秀実（ほづみ）

食欲の秋！　美味しい食べ物を前に食欲が止まりません。スポーツの秋！　わかってはいるけどなかなか体を動かす気力が湧いてきません。ということで、この季節は決まって体重の上昇トレンドが止まらないのです。

そこで、体力増進と健康維持のためジョギングを始めたのですが、モチベーションを保つために月に一度はマラソン大会に出場することにしました。一ヶ月に十回くらいは練習することを目標に掲げ、みるみる体重が減っていく予定ではあったのですが・・・実際には走れない理由を探してばかりで体重のトレンドは一向に変わりません。

練習不足のままで大会に臨むのですが、やっとの思いでゴールした後に飲む至福の一杯は、充実感も手伝って格別に美味しいことに気付きました。一応は頑張ったご褒美に、今日くらいはいいだろうと食欲も増進するのです。ホッと一息ついて、明日からまた頑張ろうといつも思うのです。

あとがき

十月のある日、法事のため北海道の実家に帰省したのですが、空港は大混雑していました。コロナの第7波も下火になってきているということもあったのでしょうか。秋の行楽シーズンを楽しむ家族連れの微笑ましい笑顔がたくさんありました。マスクのない満面の笑顔を見せ合う日もそこまで来ているのだと期待したいですね。

さて、今号も皆さまにご協力いただきながら滞りなく発刊することができました。今号では、広報部員が独自に取材をして執筆するという試みにも挑戦しました。手前味噌ではありますが、本誌が完成するたびに良い作品が出来上がったと感動しています。これも偏にお忙しい中を寄稿してくださった皆さまのご協力の賜物です。

ありがとうございました。

森山 秀実

〈広報部〉森山　堀内　山田　大橋　時田
米岡　浅川　根尾　岡﨑　西川
塩川　市原

情報　第五七七号
編　集　文京区保護司会　広報部
発行人　文京区保護司会会長　亀田一良
事務局　文京区春日一－一六－二一
文京区役所福祉政策課内
印刷所　企画・宣伝協同組合
エコフィールド事業本部